

七、北米奴隸解放への寄與

米國から歸えつてより數年間、エリゼは比較的平穩の中に、兄のエリイとともに主として文筆の勞作に没頭することが出來た。そしてエリゼが漸やく學者として世界にその名を馳せるに至つたのも、この時期から始まる。蓋し彼が英國から北アメリカに行き、更に遠く南米に旅する間に、廣大無邊な自然の種々相を觀察し、且つ多く讀み、具さに研究した結果は、徐々に彼の腦裏に一大勞作の構想を形成せしめつつあつたのである。一八五七年にフランスに歸えるや否や、彼は『哲學評論』(Revue Philosophique)に『ヨーロッパの土地の歴史』(Histoire du sol de l'Europe)を執筆して世の注意を引いた。一八五九年から六七年にかけて、彼は『兩世界評論』(Revue des Deux monde)に地理及び政治に關する種々な論文を連續して發表した。そして、その大部分はアメリカに關するものであつた。同時に彼は『世界の旅』(Tour du monde)その他の地理雜誌に執筆し、更にパリで有名な大書店ハシェットで發行した旅行案内書を幾冊か編纂

した。その間にまた、ドイツやアメリカの書物の翻譯にも力を注いだ。彼が雑誌「協同」(Coopération)誌上に、奴隸廢止論者として有名なジョン・ブラウン(John Brown)に關する興味ある一文を出したのも此の時分のことであつた。ヴァージニアの奴隸制擁護主義政府がブラウンを絞首刑に處したことは、即ちあの南北戦争の前奏曲であつたのである。一八六〇年、彼は『兩世界評論』誌上に四回にわたつて『合衆國に於ける奴隸制度』に關する輝やかしい研究論文を公けにした。大統領リンカーンは彼の努力に報ゆるために報償の申出をしたのであるが、若いエリゼは簡單無造作にそれを拒絶した。その時の事情を甥のポール・ルクリュは次のように書いてゐる。

「あの文章は多大の反響を喚び起した。彼の血氣にはやる憤激をぶちまけて、彼は奴隸制反對派のために傾倒したが、それは蓋しフランスの、否、寧ろ世界の輿論の一部を醸成するに至つた。この言論攻撃は北米合衆國にもまた大きな反響を起したらしく、彼の遺したアルバムに、五十枚ほどの米國志願兵(南北戦争、即ち奴隸解放戦争の……石川)の寫眞が發見される。それには各々その所屬部隊の番號と姓名とが記入されており、はるばる米國からパリの筆者(エリゼ)に送つたものらしい。且つワシントンの政府もまた、彼の論文に注目し、パリ駐在米國大使(若し私が誤つていなければウォシバーン Washburn という人)を通じてエリゼ・ルクリュに褒賞

を申し出た。ところが若者が何物をも受け容れないので、大使はルクリュと交友を結ぶに至つた。ブトナム嬢(Putnam)がパリ・コムミュンに際して、エリゼをブレスト監獄の囚徒の中から發見し得たり、また英國やアメリカの學者達を動かして、あの抗議をなさしめたのも、全くこの外交官の助力によつたものであらうと思ふ。云々」(「Le Semeur」 le 8. Fev. 1928.) 彼の論文が如何に強硬なもの、彼の憤激が如何に熾烈であつたかが、能く察せられるであらう。彼の一本のペン先から迸ばしり出た彼の熱血が、新舊兩世界を動かしたのである。そして、その結果が、後日のパリ・コムミュンに際して、不條理な危難から彼を救出するに至つたのである。

さて次で一八六一年に於ける彼の勞作中で、最も重要なものは、何と言つても『シエラ・ネヴァダの旅』(Voyage de la Sierra Nevada de sainta Martha)である。彼はこの紀行文中に始めてその深遠な、殆ど豫言者的な見解を披瀝している。即ち彼は、この地に於ては、黒人も白人も原住民もいるが、それは社會學に示される如き混合が、雜居接觸によつて正に成立していることを示すものだと言つてゐる。「舊世界がその人口過剩のために南米の無人境に多數の小供を送る時、その動搖する移民の満潮が、あのイスパノ・アメリカ的共和國に既に成就せられたような

結合を見るか、それとも南米の現在の住民が、外來の總ての人種を結合して一體となるに充分な稠密さを得るに至るか？ われわれに眞實と見られるのは此の後者であり、それは種々な起源を有する總ての民族をして最後に融和せしめ、平和と幸福な世紀にまで人類を生れしめる。新らしい社會狀態創成の爲には處女大陸が必要である」これはロバート・オーウェンや、フリーエ派のコンシデランが考えたことに一步を進めたものである。彼は更に言う「諸大陸の將來の歴史に對して如何なる役割をヌーヴェル・グルナード(コロンビヤ)は持つか？ 若し諸國民が、それを養う『自然』に常に似るものとすれば、諸大洋が互に接近し、あらゆる氣候風土が並存し、あらゆる産物が生じ、五種の山脈が集合して、驚くべき風景の種々相を創成するこの國に、何をわれわれは望むべきか？ そのパナマ地峽は、西方歐洲諸民族と東亞の諸民族との出會所となるであらう。クリストフ・コロンブスが、地球を過らす鎖の兩端を結ぶに至るであらうと豫感したのは此處なのである。私は隠さない、私は私の祖國に對すると同じ情熱を以てヌーヴェル・グルナードを愛する。この讚美すべき、そして未來を持つた國を何人かに知らせることができれば、私は幸福である。』このエリゼの豫言的見識はなお人類の未來の運命に係わるものである。コロンビヤ(ヌーヴェル・グルナード)をして未來世界の模範的幸福境たらしむべく、現代の人類は餘り

に險惡な鬭争に没頭しているが、永久に武器を捨てて平和民族たることを覺悟し宣言した吾々日本人は、率先して此處に地上の天國を築くべき使命を持つていと言えないか？ 太平洋の潮流は、歴史以前から、吾々東亞の民族を此の地方に送つて、此の地方の原住民に混血せしめたのである。

八、結婚・旅行・觀察

一、旅行 一八五七年に南米から歸つてから、一八七〇年の佛獨戦争、パリ・コンミュンに至る十數年間に彼は前段に略序したような著作を公けにした。しかし彼の多くの科學的著作は普通の學者のように書齋に閉じこもつて營むのではなかつた。身自ら對象にぶつかつて全心全我を以てその對象の生命を感得するのであつた。自然そのものを把み取つて、それを紙面に活かすのであつた。それ故に彼は、この十餘年間というものの毎年どこかに大旅行をした。それも決して汽車や自動車で宿屋から宿屋へ轉々とする旅行ではない。大ていは強力を伴い自らもハーブル・サックを背負つての強行軍を好んだ。

彼は南米から歸國すると數日パリに留まつて、すぐにビレネ山麓のオルデに赴いた。それは勿論長い間、心配かけた母への孝行旅行であつた。その翌年には結婚するためにボルドーに行き、同年バリの大書店ハシェットに編集員として入社した。一八五九年にはブレイメン、ハンブル

グ、ケーニヒスベルグ、ベルリン、ドレスデン等ドイツ諸地方を廻り更にスイスに入りモン・ブランに登つた。一八六一年にはビレネー山脈縦斷・横斷旅行をなし、リュクサクを背負つて、谿谷と峻嶺の大氣を思う存分に呼吸した。その翌年にはロンドンの世界博覽會を見物して特にオーストリアの科學的努力の顯著なことを稱讚した。一八六五年にはシシリイ島に渡り、エトナ山の噴火を探求した。これ等は特に眼立つた旅行であつて、この他に彼の足跡は隨時に到る處に印せられた。前段に於て、私はエリゼの著作活動を序したから、本章に於ては主として彼の實生活の面を略述しよう。第一に彼の結婚を見る。

二、結婚 恐らくエリゼは、米國ニュー・オルレアンの移民フォルチエ氏の家庭教師を辭し去つた時から、虐待される黒人に對する深い同情を持ち、それと同時に自分の出生地にて出會つた黒白混血少女のことを思い出したのであらう。エリゼは未だ生活が安定してはいないが、兎も角も結婚しようと思ひたち、そのベター・ハーフを求めるべく、サント・フォア(エリゼの出生地、ボルドー附近)に赴いた。それは一米國人とゼネガル黒人との間に生れた娘で、フランスの祖母の許で養育されたのである。人種的偏見を持たないどころか、その偏見と闘つて來たエリゼは、わざわざボルドーまで尋ねて行つたのである。勿論、歸國早々兄嫁の媒介で既に當人同志の間

には婚約が成立していのちである。その時の状況をエリゼは兄のエリイに書き送っている。

友よ

結婚は月曜日の夜に行われるであろう。そして火曜日五時にわれわれは出發する。木曜の夜に待つていて下さい。契約は免れた。経過は良好だった。セネガルの取引を規則的にするには契約が必要だと先方は言い出した。僕は毛を剪られる羊のようにおとなしくしていた。Gが紹介された。彼は冷静嚴肅な面持で握手し、やがて起草すべき記録の性質を説明し始めた。僕は注意深く聞いた。正直な紳士は、所得する動産・不動産の共有なること、結婚の契約というものは、妻に對する夫の利益、夫に對する妻の利益を擁護する以外には用のないものであることを叮嚀に細かに説明するのであった。しかしセネガルの取引は契約無しでもできましたか？——そうです、結婚の記録がその代りになります——では吾々は契約の必要はありませんね？——しかし御注意までに申しますが、市長が大きな文字で、この夫婦はフィヤンセー（一定の期間婚約状態を續ける道德的规定で、これを缺くことは破廉恥不倫と一般に見做されるのである……石川）をしなかつたと書きますよ、——可いですよ！——われわれは市長にその大文字を頼みましょう！——あー、フィヤンセーをしない、それはまあ重大だ！可いですが、あなたが或る相續をする、

例えば人があなたに六千フランを遺したとする、あなたは其の内三千フランを失い、その金はあなたの妻君のものになりますか？　よろしいですか？——失うこと、それは得ることですよ！　私は他の三千フランをも取れと妻に言うでしょう——あー、ほんとうにね！　氣の毒なこの男は、茫然自失、契約の問題は大きな羽ばたきをして飛び去つて了つた。

この助け船に後見人が言葉を添えて、われわれの一人が死ぬこともある、そして他の一人が困窮の中に取り殘される、ということに注意した——僕は言つた、その時は、われわれは遺言を書きます。そしてわれわれは契約を必要としません。私は何も持たないが、しかし一枚の紙に一切を妻に譲ると書きます。同様にクラリス（妻君となる人）も最後の意志として一切を夫に譲ると書きます。公證人はいたまらなくなつた。彼は立ち上つた。呆然として眼を丸くし、髪を逆だて、口をあいて。僕はそれを戸口まで見送り、彼の解り易い説明を讚美した。後見人の方は喜んで僕に握手した。ああ！君はよい青年だ、僕もだよ、僕も自然の人間だよ、一自然人だよ云々

以上のような工合で、エリゼは婚約の期間も經ずに直ちに結婚した。それは當時のフランスで

は大へんな型破りであつたのだ。一八五八年十二月十六日には、彼は母親にこんな手紙を送つてゐる。

最も愛するお母さん。

クラリスと私とは水曜日の晩からパリに来ています。旅行は全く幸福でした。そして、今われわれは、非常に心地よい居住に入りました。

それに、總て好都合に運びます。十五日以内にハシェット家の職場に入ることができるようになるそうです。それは愉快なことであると同時に私の仕事が規則だてられるのです。それは一つの區切りになります。

一同皆健在です。

私の口着を愛するお母さんに

エリゼ・ルクリエ

こんな風にして結婚した彼は、同時に書店ハシェットに入り、ここに始めて地理學的實際活動に入り、多くの地理學的論文を公けにし、紀行や旅行案内を執筆しまた編纂した。そして新妻を家に置いて絶えず旅行した。

三、乞食 一八六五年、エリゼはシシリイ島に渡り、エトナ噴火山を一週して、絶大無比の自然力を讚美している。その旅行中に彼が美しいクラリス夫人に書き送つた手紙が十本ほど遺つてゐる。その中のミラツォから送つた手紙に乞食のことが面白く書いてあり、エリゼの思想や性格がよく表現されてゐるから、それを此處に紹介する。

「僕の旅行は終つたと言へる。少し隔つたメシナに行き、そこから汽船で直接にかまたはナポリを経て、リヴルン(リヴォルノ)に歸えればよいのだ。近日のシシリイ島出發を報ずるこの手紙が君に着くころ、僕は恐らく既にフロレンスに着いているだろう。

「汽船のお蔭で、また僕の早く歸ろうという念願から、もう僕はパリからも又僕の最愛のものと達からも遠くはない。僕はまる一ヶ月間シシリイにいようと考えていたが、しかし二十八日しかないことになる。事實は僕の財布が豫想よりも早く輕くなつて了つたのだ。その原因は、『酒代』とか、『心付け』とか、『志し』とか、または單なる施しというような間接税と交通の不便困難とにある。多くの世紀以來、奴隸になつて來たイタリア國民が乞食になつたということに驚くに足らない。寺院の中でも、汽船の甲板でも、必ず乞食が取り巻いてくる。この國にとても大へんな深刻な貧困のあることは事實だ。家だの家具だの衣料だのという形で蓄積される

資本にしても、フランスの四分一になるにはなお可なりの年月を必要とするであらう。七八歳から十歳までの小供達が全然裸體で道を歩いている。多くの婦人達が、若い娘達さえ、腰の廻りに狭い腰巻しか着けないが、それはまだ行儀正しい方だ。これ等すべての人々が住んでいる茅屋！それや實にひどいものだ！あ！平等の友愛の時代がくるのは何時のことか！理論としては、僕はこれ等の乞食の兄弟だ。しかし僕が過つて授かる家庭や學問や精神的自由の歡樂は別としても、僕はパンを持つ。そしてあの人達はそれを持たない、何時でも。

「だが托鉢同胞達の乞食は別ものだ。あのサンダル、あの頭巾、あの垢面、あの一ぱい詰った乞食袋を持った托鉢僧にはどこでも出會う。彼等は快活で剛強で何のくつたくも無い人のように雄大に歩く。彼等は毎朝非常に早く市場に行き、そこで一番よい物を選び取り、それからお友達のところや、パン屋や、肉屋や、揚物屋を廻る。旅行をする必要を感じてか？彼等は最初に出會つた馬車を目がけて、車内に一席を需める。でなければ馬の臀に乗せて貰う。或はまた解纜しようとする船の甲板に飛び乗る。彼等はただ選擇すればよいのだ。それから、人の言うところによると、彼等は施與せられた食料などと交換に約束の宗教的祈禱を口中につぶやくだけの良心を持つているとのことだ。疑念を抱く僕は、宿屋の亭主に言うた、『だがこの乞

食僧達は何もすることは無いんですね？』『何もありません！ですが、私の爲に、貴方のために全世界のために、お祈りしてくれるのは彼の人達です！』僕は口をつぐんだ。彼等坊さん達はこうした祈禱にも係わらず、猥談淫行がとても好きで、それもフランスのジェスイトのように隠れてするのでなくて、公然とやる。私は少くとも自分で見たところによつて、こう判斷するのだ。（この手紙は不幸にして後が缺けている）

四、時局切迫 一八六八年から九年にかけて、エリゼの時局觀は彼を可なりに興奮せしめたりしく思われる。兄のエリイに送つた手紙や、義弟のビエール・フォールに書いた手紙に、よくそれが現われている。それはパリ・コンミュンの前奏曲とも見られる社會情勢で、『インタナショナル、パリ・コンミュン』の章と照し合せて見ると、ルクリュの心境の動きが自然的流動を辿つていたことを想像させるのである。『平和と自由の國際聯盟』に於て、バクニン等とともに急進的無政府主義的主張を以て、この聯盟から分れたのは一八六八年九月で、その十月にはスペイン革命が勃發し、共和主義者が勝利した。兄のエリイは聲援に赴いて、バルセロナ州のサバデルに於て大演説を試み、『予は演説家としてここに來たのではない。ただフランス共和主義の一人とし

て、また世界共和主義の一人として、諸君の光輝ある革命を祝賀・讚美すべく來たのである」と冒頭した。この演説筆記の載つた新聞を讀んでエリゼは非常に喜んだ。このカタロニアの革命勃發に際して、バクニンはエリゼに是非行くようにと勧めたらしいが、エリゼは仕事や周囲の事情で行けなかつたのである。エリゼはまた、このカタロニアの革命が軍閥の獨裁に陥りはせぬかと危惧した。果せるかな、この連合的共和制はカタロニア地方に樹立せられ、やがて國會によつて宣言せられたのであつたが、それは少時の間で、一八七四年には完全に王政が復古せられた。しかしエリゼは一八六〇年代の終りに近づくに従つて社會狀勢の切迫を感じて、大々的に用意せねばならぬと言つていた。

一八六九年義弟のピエール・フォールに送つた手紙に次の様な文句が見出される。

「僕としては公衆の集會に大賛成だ。無教育な人々の發する粗野な言葉や、間違つた語句や、狂氣じみた語調や、熱狂した絶叫やは僕には些かも恐ろしくない。寧ろ之を聴くのが愉しい。なぜなら、こうした精神の中にあるものは最も早く進發せねばならないものだから。それに、辯説家の大多數は互に尊重し合い、また公衆を尊重する。そして彼等の中の幾人かは雄辯で、そ

の雄辯は衷心から迸しり、また事實の確固たる討究に基くものだ。聴衆はというに、これがまた立派だ。彼等は何事を置いても先ず研究しようと欲する。互に押し合いながら、汗臭さい塵だつた空氣を呼吸しながら、彼等は數時間の間、正義のそして自由の言葉を聴きたいという希望に満ちているのだ。

君も知つての通り、大問題はパンのそれだ。他の言葉で言えば財産權のそれだ。外觀上どんな風に論じられても、結局はそれだ。それが愉快なのだ。大きな社會的變動が準備されていることが見えないのは、餘ほどの目くらに相違ない。その準備をするのに、早すぎるということはないよ。一體パトロンと雇人とが、ブルジョアと労働者とが、社會的清算を行うのに友愛的に合意するだろうか？ いやどうも！ われわれはこんな希望が許されるべく餘りに野蠻なのだ。そこで、期待されねばならぬことは、それは戦争だ。あたかも一八四八年六月のように、講演も絶叫も、あれは戦闘の前置きに過ぎない。われわれは吾々の楯の中で大いに怒鳴ろう。われわれを實際よりも大いに恐ろしく見せるように。……

近づく革命の目標は平等を確立するにある。物質生活と知識生活との特權制を絶止するにある。

權利はすべての人に屬せしめ、社會の力を麻痺せしむるところの、主人と雇人の對立、ブルジョアと勞働者と農民との對立を絶止するにある。この戰鬪のために、こんなに長く耐えて來たからは、今度は平和と友愛との爲に生活すべきである。が今度の革命が些かおくれるとして、かくも熱望して來たこの平等が果して齎らされるか、どうか？ さあ、それは。しかしわれわれは子孫のために働こう。廢墟の中に、或は流血の中に、なお一步を前進しよう。

君の兄弟、 エリゼ

彼れエリゼが如何に切迫して時局を感じたかが察せられよう。この手紙は多くの同様の書翰の中の一例として選んだものに過ぎない。エリゼはこの同じ一八六九年二月二十二日に最愛の妻クラリスに先き立たれた。しかも二人の可愛い子女を遺されて。